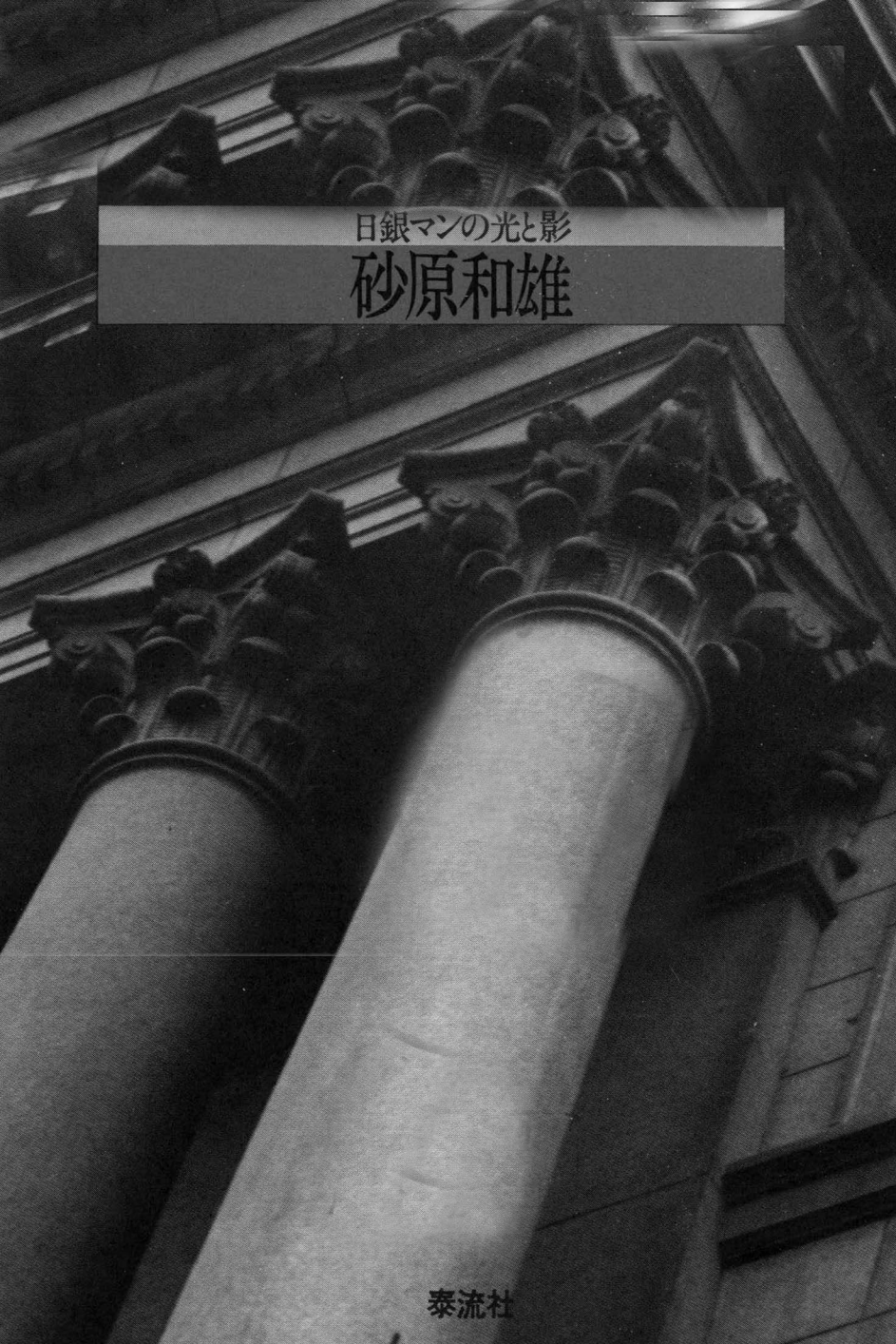


日本銀行物語

日銀マンの光と影

砂原和雄





日銀マンの光と影

砂原和雄

泰流社

日本銀行物語——

定價——九八〇円

著者——砂原和雄◎

発行者——西村允孝

発行所——泰流社



本社 〒112 東京都文京区小日向2-18-4

編集部 〒100 東京都新宿区南元町10

営業部 電話 ○三三五七六五五六—編集

電話 ○三三五五五〇五三—営業

振替 東京〇——一六三七六五

印刷・製本——誠之印刷株式会社

装幀者——池田 拓

写真——島 康夫

編集者——高橋 徹

日本銀行物語

目次

興人の危機	7
MM体制	18
エリートの関門	29
“花の三十年組”	40
自殺	51
公定歩合引下げ	62
決断	73
夏の明暗	84
造反劇	94

大詰め工作	105
興人倒産	116
人事	127
安宅事件発生	138
海外勤務	149
机上作戦	160
意識改革	171
付 森永日銀総裁の五年間	182
あとがき	197

日本銀行物語

日銀マンの光と影

興人の危機

一

雨あしは、朝、善福寺のマンションを出るときと変わらなかった。こまかく、もやをとまなう雨だった。コウモリ傘をさして一歩外に出ると、いつもけたたましく感じる神田駅の発車ベルや駅員のマイクの声がずっと遠のいた。今日の雨は視界だけでなく音もさえぎっている。

梅雨にはまだ間があるが……と顔を上げると、ぞくぞくと列になって歩く人影が目に入った。先はかすんで見えない。左側を足早に歩く規則正しい動きで、一見して出勤を急ぐ日銀マンとわかる。

神田駅西口から日銀北門に通ずる五〇〇メートルの裏通りは、土、日曜を除き、この時間、決まって日銀マンでうまる。彼らにとって一分以内の狂いで新館の白い御影石に靴を乗せることがその日課の第一歩であった。玄関の左壁にかかった丸い大時計は、自分の腕時計よりも絶対正確であるという信頼感が彼らにあった。時計を見上げてホッとしたように歩調をゆるめる者もあったが、多くは一瞬、背筋を伸ばし、緊張気味に行内に入るように見えた。

中村幸一は、毎朝、こうした日銀マンの流れの中を歩きながら、ときに「みんなまじめだな」と感心することがあった。そういう彼もまじめだった。ロンドン事務所勤務から帰って四年間、電車の事故でもない限り五分と出勤時間がズレたことはない。営業局総務課長に昇進して三階の席につく時間が八時五〇分から九時十分、二〇分くらい下がっただけである。日銀マンの妻を自覚している美子は、西荻窪駅までの歩く時間、神田駅までの国電乗車時間を念頭にきちっと送り出す。今朝は、「雨だから歩くのに三分くらい余計かかりそうよ」と送り出されたものだった。

美子とは熊本支店勤務のとき結婚した。幼馴染だった。土地では古くから名の知れた庄屋の一人娘で、地元の女学校を出てからお茶を教えている母の手伝いをしていた。父は村会議長をしていた。幼馴染といっても知っているのは中学生のころのことで、再会したときは紹介者を通じて逢ったので、半分見合いといってもよかった。それでも見合いのあと、「美ちゃん」という幼いころの呼び名が自然に出てきたあたりは、この十数年間、心のどこかに幼い日の面影をいだいていたせいだろう。

日銀の同僚には見合い結婚が多い。それは局長や課長が頼まれた見合い写真を回してくるといった単純なものではない。相手の写真を見せられたときは、こちらの氏素姓はすべて相手方に伝えられ、了解を得ているものとみてよかった。「君さえ気に入れば……」といった持ち込み

が多かった。相手方の本人はいうにおよばず、家族や係累は日銀マンにふさわしいことで、保証付き”であつた

中村にもこうした結婚話が幾度かあつた。その話にのれば先行き安定した生活が保障されているようにもみられた。しかし、彼はそんな話に耳をかしたことがなかった。いざというときに、こちらから声をかければ、見合いの相手ぐらいいくらでも集まるという自信が一方にあつたからでもある。

三年の熊本支店勤務を終えて本店営業局にもどつたとき、「中村は村長の娘を略奪してきたというではないか」とひとしきり酒席のサカナになつたことがある。「オイ！奥さんはどこの人だ」という問いに、中村が自嘲気味に答えたことに尾ヒレがついたものだった。

日銀マンが同僚に「奥さんはどこの人だ」と聞くのは、「女房のおやじはだれか」という問いにつながる。こういう質問は本人が財界や金融界の有力者の息子でないときに発せられる。奥さんによってどれだけ行内でのハクをつけたかという風にもとれ、聞かれた方としてはあまり愉快でなかつた。

もっとも、本人にただすまでもなく、結婚した段階で相手が「どこの人」かは同僚間にそれとなく知れわたるのが常だった。よくいえば、日銀マンは同僚間の連帯感が強いともいえるが、実は一般世間との接触が少ないだけに、同僚間の動きに互いに強い関心があるのである。

略奪ではなかったが、中村は美子を有無をいわずに自分の妻にした感があった。見合ひした翌日に再び逢ったときにはもう結婚の約束をしている。幼馴染という安心感がそうさせたのかも知れない。素直についてくる美子をみて、「これでよい」と即断したことは事実である。これはまた、彼の「自信」でもあった。

後に、彼はこの即断がよかったと思うことが度々あった。多くの同僚のように、いわゆる「この人」を妻にしなかっただけに、変に妻やその家族に気をつかうこともなく、からだごと仕事に打ち込むことができたからである。

二

三階のエレベータを降りると北側に営業局がある。常時開いている真ん中のドアを入ると、広い部屋に緊張感がみなぎっている。中央に並ぶ資金係が一斉に電話をとって、それぞれ担当金融機関の資金繰りをチェックしている。みんな真剣そのものだった。中村も数年まえ資金係の一人であった。毎朝の大手都銀とのやりとりを通じて日銀マンとしての生きがいのようなものを感じていた。ここが日銀の中枢だと思うこともあった。仕事に充実感があった。

若い資金係が脳目もふらず仕事に打ち込んでいるのに対し、奥の机に並んでいる五人の調査役はそろって余裕があるように見受けられた。数字をじっと眺めているものもいたが、なかに

は朝から雑誌を読んでいるものもいた。中村が机の椅子に手をかけるのをまっていたように、そろって顔を上げた。特別変わったことはないという風だった。

きちんと整理された机の上に、折りたたんだ新聞とは別に総務係が選んで半紙にのり付けした新聞の切り抜きが置いてある。中村はだまってそれをみる。たいがい出がけに家で目を通した三紙にのっていたものだが、ときたま「おや」と注意を引くものがあった。この日は、一番後にあった。「興人に金融不安説」というベタ記事であった。会社側は「単なるうわさで迷惑している」と述べていると末尾にあった。多くの新聞は無視したもののようにだった。

興人の金融不安説については昨年末ごろからあった。一度、三月中旬に株が暴落したとき、主取引銀行にあたる第一勧銀から担当者を通じて聞かせたことがある。そのときは、「心配ない」ということだった。しかし、その後も株価の下げ足が早いように感じられた。

このベタ記事に赤鉛筆でマル印をつけると切り抜きを局長秘書に回した。それとなく、局長の注意を喚起しておくべきだと思ったからである。

一か月まえ、総務部長から営業局長に昇格したばかりの重野泰は中村よりだいたい十分遅れて出勤する。車の混み具合で若干時間がずれることもあったが、中村より先に営業局に入ることとはまずなかった。重野は一番奥のふだんは締め切っているドアをバンと勢いよくあけて入ってくる。胸をはって部屋に踏み入るとぐるっと見わたして軽くうなずくように角の局長室に大

股で歩くのであった。それは、横綱が力のはいった仕切りのあと土俵周囲を一瞥するのに似ていた。中村のまえに並んだ調査役がからだをよじって振り向き、あいさつする。

十時を回ると総務係が一日の銀行券や財政払いの見通しをまとめた資金需給の予想表を持ってくる。ほぼ前日の予想通りの動きが見込まれるものの、銀行券の伸びが鈍い感じがあった。この日も午後三時に締めた実績をみると、一か月まえに立てた予想を若干下回っていた。「景気の実態は予想以上に悪いのではないか」、中村はこのところそんな感じをいいていた。これは二十年間一貫して営業畑を歩いてきた彼の「直感」だった。

当時、調査局には景気の先行きに楽観論が支配的だった。だが中村は、調査局の景況観には常々不満をいいていた。理論が先走って実態を見誤っているのではないか、と思うことが度々あった。石油ショック後の根本的な景気変動を調査局は見失っているのではないかと思われなかった。

こうした危惧はやがて現実のものとなっていた。

三

緊張した環境は、実際には騒々しいにもかかわらず、それが秩序をともなったとき、むしろ静かな感じを与えるものだ。総務課長席に座っているとき、中村は、山あいの滝壺で一瞬水の

音を忘れるような静けさにおそわれることがあった。資金係があわただしくとっている電話も、水が岩にはじいているさまが見えるだけで不思議にその音は聞こえないのに似ていた。中村はこの営業局のピーンと張りつめた雰囲気が好きであった。この席に座ると、かなり残っていると思われた前夜の深酒も、すっと抜けるような気さえした。どんな重要な判断を迫られても、ただちに正確に応えられるような感じだった。

ときに、この静けさが壊れることがあった。異質な外部の人間が仕事以外のことでたずねてきたり、家族からの電話があった場合であった。そんなとき、中村は早々に話を切り上げ、気晴らしにトイレに立つことにしていた。

「総務課長、お電話です」

局長秘書の山田洋子が呼びにきた。秘書らしく一段と声を落している。

「局長は外出中ですと申しますと、ぜひ総務課長にと、第一勧銀の岡本副頭取です」

重野は水曜会に向いて留守であった。局長が留守の場合、電話は必要に応じて総務課長が受けつぐことになっている。岡本副頭取の電話は局長への直通電話だった。

「総務課長の中村です」

「第一勧銀の岡本ですが、興人のことで早急に営業局長にお話ししたいことがありますて、局長が留守ならぜひしかるべき人に会わせてもらいたい」

岡本副頭取の声はかすれて遠いように聞こえたが、言葉尻はしっかりしていた。重要な決断をくだしたあとのためらいが言外に感じられた。中村の心に何か伝わるものがあった。時計は午前十一時半を回っていた。

「どうぞいらしてください。重野は水曜会の昼食会に出ています。連絡しますが間に合わないときは、しかるべき人にお引き合わせします」

「よろしく、それではさっそく」

水曜会は日銀の営業局長を囲んで毎週開く大手都市銀行と長信銀行の本店営業部長会である。重野にとっては営業局長として初めて出席することになるため、この日簡単なあいさつをすることになっていた。重野はまだ会場に着いていなかった。中村はやむを得ず営業担当理事の山川に会わせることにした。

山川は総務部企画課長から大阪支店次長を経て、総務部長、名古屋支店次長、営業局長と日銀のエリートコースを歴任した理事で、秀才中の秀才。「カミソリの山川」といわれるほど、日銀でもシャープな判断力で知られていた。あまりにも合理的で、他の言辭をはさむ余地のない結論を即座にくだすため、部下にけむたがられる一面もあった。大蔵省などからは典型的な日銀マンと評されていた。中村にとってもどちらかといえばニガ手な理事であった。

とくに今日は、岡本副頭取がどのような話を持ってくるのかわからない。そのための対応策